



シリーズ ユニセフってなんだろう 4

お金だけではない、愛ある支援を

ナババ・アイリーン 関西学院大学国際学部3年生 (あしなが基金レインボープロジェクト留学生)

大阪通信 41号「シリーズ：アフリカを語る」で、ウガンダでの思い出と将来の夢を語ってくださったアイリーンさん。今回は、2年半ぶりに帰国した故郷の様子や日本での生活、大阪ユニセフ協会ボランティアとして体験したユニセフ活動を通して、支援される人たちが何を求めているのかについて伺いました。
聞き手：平野陽子、通訳：岩田恵里奈 写真：前田美代

家族との再会

—アイリーンさんの生まれ育ったウガンダのナンサナは、2年半ぶりに帰国して変わっていましたか？

アイリーン 大きく変わりました。ナンサナは村から町になりました。ビジネスが発展して、町全体が忙しい感じになりました。住居費が上昇し、子育てがしにくい環境になったように思います。

—帰国して一番嬉しかったことは？

アイリーン 家族に会えたことです。妹と2人の弟の成長に驚きました。ウガンダの伝統的な料理 (Matooke：青バナナを使った料理) は日本でも食べているのでそんなに懐かしくありませんでしたが、久しぶりに家族みんなでご飯を食べたのが嬉しかったです。

ウガンダの子どもたち

ウガンダでは依然、内戦やHIV/エイズの流行で孤児となった子どもが多くいます。アイリーンさんも父親をエイズ

で亡くし、あしなが基金の援助を受けて来日しました。

—子どもたちはどのような生活をしていますか？

アイリーン 家庭によってそれぞれのライフスタイルがあります。ウガンダは、裕福な家庭とお金がまったくない家庭との格差がとても大きいです。そして貧しい家庭が大多数を占めています。多くの原因はエイズ問題によります。両親が亡くなったエイズ遺児は、面倒をもらえない状況に陥ります。親戚が面倒をみたり、兄弟が多いとお兄さんやお姉さんが小さい兄弟の面倒をみますが、それにも限界があるのです (コラム参照)。

—子どもたちに必要な支援はどんなことですか？

アイリーン エイズ遺児は愛に飢えています。学校や教育に対する支援金は各国から届きます。しかしたとえ学校に行くことができたとしても、家庭で十分に食べることができなければ、お腹が空いて勉強に集中できません。

お金の援助だけでなく、子どもたちが安心して過ごせるように、引き取った家族や家庭への援助、あるいはケアが受けられる場所づくりといった、心理的な支援がもっと必要とされています。



11月10日に開催されたチャリティコンサートで、ウガンダの民族音楽に合わせて躍りを披露した(右端がアイリーンさん)

アイリーンさんの夢

「大阪通信」41号で「ウガンダの経済を変えていきたい、エイズ遺児の子どもたちと一緒に豊かになっていきたい」と夢を語ってくれました。あれから2年が経ち、夢はどのように膨らんでいるのでしょうか？

——ウガンダをどういう国にしていきたいですか？

アイリーン 現在ウガンダは発展途上国の一つです。発展途上国として、これからも成長していきたいです。そして、将来的にはお金の援助を受けてばかりいるのではなく、日本のように支援する側の国にしていきたいです。

以前は、勉強して働いて結婚するというのが私のライフプランでしたが、日本留学のチャンスを得て、私の考えは大きく変わりました。日本に来て、ウガンダにいたころよりウガンダの国のことを考えるようになり、自分の国がもっと好きになりました。ウガンダの国の悪いニュースを聞くと、自分のことを言われているような気がするし、ウガンダ人として責任を感じるようになりました。将来は自分のためだけの人生ではなく、ほかの人や国のためになる人生を送りたいです。今は大学院への進学を考えています。さらに勉強をし、経験を積んで国際的な組織で働きたい。今しかないチャンスをしっかり掴んで、世界のために、そしてウガンダの将来に貢献していきたいです。

——最後に、支援するときに大切なことは何だと思いますか？

アイリーン 多くの人がウガンダのような途上国を支援しようとしてくれます。けれども、支援の明確な目標を持った団体組織は少ないように思います。支援してくれる人は、まずその支援する国を実際に訪れてほしいのです。そうすれば、その国が抱える一番の問題やその解決のためにどういった支援をすればいいのかが見えてくるからです。皆さんも、ぜひウガンダに足を運んでください。Weebale! (ウガンダ語：ありがとう!)

日本での留学生活とユニセフ活動

アイリーンさんは大学では国際学を学んでいます。日本ではどのような生活を送っているのでしょうか。

——大学生生活はどうですか？

アイリーン とにかく忙しいです。でも先生方がとても優しいので、授業を受けるのが楽しいです。ホームシックで寂しくなることもあるけれど、「日本での生活をがんばろう」という気持ちでいます。大変な時は、友達が助けてくれます。

とはいうものの…、日本語が大変です!!多くの授業は英語で受けていますが、日本語での授業もあります。3年生になって少しは読めるようになりましたが、漢字がとても難しい。他の勉強も色々あるので、日本語を勉強する時間を多く作れないのです。

——日本でユニセフ活動に参加されたきっかけは何ですか？

アイリーン ユニセフのことは以前から知っていましたが、「大阪通信」41号で取材を受けたことでユニセフボランティアとの接点ができました。私はあしなが基金レインボープロジェクトのおかげで日本留学の夢が叶い、日本でいい生活を送れるようになりました。お金はあまりないけれど、私にも何かできることがあるのではと思い、日本でユニセフ活動に参加することにしました。

——楽しかったことは？

アイリーン いずみホールでユニセフカードの販売をした時が、一番楽しかった。カード販売をしていたら、いずみホールの関係者の方が声をかけて下さり、後半のコンサートを聴く機会を作ってくれたのです。ボランティアをして「いいことをしたなあ」という思いと、コンサートを聴くことができた楽しい思い出で、一番印象に残っています。

HIV / エイズの影響を受ける子どもと家族が直面する課題 (「世界子供白書2005」より)

HIV / エイズは子ども時代の基盤そのものを引き裂きつつある。HIV / エイズで親を失った18歳未満の子どもの数は、2003年末で約1,500万人にのぼった。その10人に8人がサハラ以南のアフリカの子どもである。感染と喪失の大波を食い止めるための断固たる行動が迅速にとられないかぎり、アフリカでHIV / エイズのために親の一方または双方を失う子どもは2010年までに1,800万人を超えると推定されている。

